

2023年6月27日

実践女子大学・実践女子大学短期大学部
教員研修 実施報告書 (Web 公開用)

1. 所属	文学部 英文学科
2. 職名・氏名	教授・村上まどか
3. 研修期間	2022年 4月1日 ~ 2023年 3月31日
4. 研修先機関 (国名)	日本大学 文理学部 英文学科
5. 研修課題名	英語の動詞に関する統語論

<p>6. 研修経過</p> <p>(月単位で記載してください)</p> <p>例) 4月上旬～5月下旬:</p>	<p>2022年4月: 日大にて、英語史に関する「英語学講義1」(保坂道雄教授)、英語の未来表現に関する「英語学特殊研究1」(吉良文孝教授)を聴講し始めた。別途、『動詞句を中心とした英文法』(仮題)という本を著わそうと、草稿を書き始めた。</p> <p>5月: 下田歌子記念女性総合研究所・兼務研究員として Linda L. Johnson (2013) “Meiji Women's Educators as Public Intellectuals: Shimoda Utako and Tsuda Umeko”を共訳することになり、翻訳に着手した。</p> <p>5月21～22日、日本英文学会第94回全国大会 (zoom開催)にて、午前中の研究発表を聴講した。</p> <p>6月～7月: Johnson (2013)「明治の『発信する知識人』としての女子教育課—下田歌子と津田梅子」の担当部分を翻訳し終えた。その部分は7月25日、下田女総研勉強会にて発表した。2023年10月開催の予定ではあるが、英語語法文法学会のシンポジウム「現代英語に見る歴史の痕跡」(仮題)のメンバーとなり、企画を始めた。引き続き日大の大学院授業を、7月29日前期最終日まで聴講した。</p> <p>8月: (病気療養のため研究中断)</p> <p>9月: 4日午後、欧米言語文化学会第14回年次大会 (zoom開催)を聴講した。日大の後期は23日開始であったが、授業には出ず、自宅で本の原稿執筆に専念することとした。</p> <p>10月～2023年3月: ほとんど自宅で著書のための文献講読・原稿執筆か、歌子論文の訳稿推敲をしていた。時折、学会や講演会を聴講した。主にオンライン参加であったが、体調が許せば外出した。</p> <p>10月15日、英語語法文法学会第30回記念大会 (zoom開催)</p> <p>同日16時から関東甲信越英語教育学会特別講演会・中島平三「英語教育の“グッド・アンセスター”であるために」(zoom開催)</p> <p>11月5～6日、日本英語学会第40回大会 (zoom開催)</p> <p>12月10日、日本語ジェンダー学会第22回年次大会 (zoom開催)</p> <p>12月22日、久しぶりに日大に出向き、保坂指導教授、堀田隆一・慶應義塾大学教授と面談の後、堀田教授による講演会「英語の歴史に見られる3つの潮流」を聴講。その後、堀田教授、日大の教員・大学院生らと最初で最後の懇親会。</p> <p>2月: 15～18日京都に出張し、15日は関西外国語大学にて滝沢直宏・立命館教授「現代英語における-ly副詞の語法文法」を聴講、16～17日は京都女子大学を訪問し松原史典教授と研究談義をした。</p> <p>3月: 4日に英語英米文学会第32回年次大会 (zoom開催)。18日、日大にて村岡宗一郎氏による博士号請求論文 <i>A Synchronic and Diachronic Study on the Infinitival Selection in the Complement of the Causative and Perception Verbs of the English Language</i> の公聴会参加。</p>
---	---

<p>7. 本研修で得られた成果等（論文・学会発表含む）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ [Johnson 2013 翻訳] 「明治の「発信する知識人としての女子教育家—下田歌子と津田梅子」 下田歌子記念女性総合研究所『年報』第 9 号、pp. 1-23, 2023 年 2 月発行. ・ A4 判で約 100 枚執筆し、『動詞句を中心とした英文法』（仮題）の原稿（出版予定）を、以下の構成で書き上げた。 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 章 品詞、コラム「冠詞は永遠の謎」 第 2 章 文 第 3 章 相、コラム「日本語のテイルに惑わされない」 第 4 章 態 第 5 章 助動詞 第 6 章 法、コラム「I should have told you の 2 通りの意味」 第 7 章 ING 形と EN 形による修飾
<p>8. 所感</p>	<p>7 月に思いもよらない病気が発覚し、闘病しながら研修を行なうという 1 年間であった。外出や出張は大幅に削減し、入院・通院、体調不良で研究できない日も少なくなかった。</p> <p>しかしながら日大では保坂教授のみならず吉良教授とも研究談義をすることができ、また優秀な大学院生・聴講生もいて刺激を得られた。自宅では細々と原稿執筆し、保坂教授や野村忠央教授（文教大学）に査読をいただけることになった。この原稿を何とか出版まで漕ぎつきたいと願っている。</p>